

## Q20 魅力あるよりよい学校づくりをするときのポイントは何ですか。

児童生徒の社会的自立は画一的なものではなく、生活適応、集団適応、学習適応などの状況においてかなりの違いが見られるものです。従って、教職員が意図的に一人一人の児童生徒との触れ合いを多くするように努力する中で、一人一人の成長をよく把握し、適切な指導や援助を行うことが大切です。

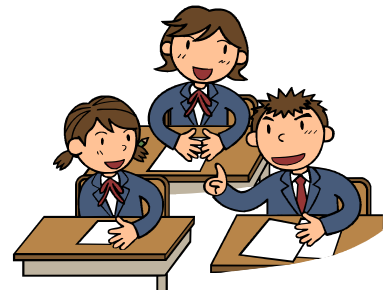
一人一人が大切にされる学校でこそ、毎日の授業や学校行事、生活行事などを通し、「自分がそこに参加している。」「自分は必要とされている。」「自分は先生や仲間から信頼されている。」という確かな実感をもてるようになります。

さて、学校が、「安心して自己を生かせる場」「個性や能力、自主性や主体性を発揮できる場」になるためには、まず、教員自身がすべての児童生徒を受け入れ尊重していく態度こそ必要です。児童生徒は、教員のそのような態度に学ぶのです。

### 1 毎日の「分かる授業」こそ大切

児童生徒の学校生活の大部分を占める授業でこそ、すべての児童生徒に「自己存在感」や「自己有能感」を味わわせたいものです。一人一人の児童生徒に「わかった」「できた」という喜びのもてる楽しい授業を展開することが必要です。

分からない授業、楽しくない授業は児童生徒にとって苦痛であり、児童生徒の劣等意識を助長し、情緒の不安をもたらす、様々な問題行動を生じさせる原因となると考えられます。



#### (1)「もっと分かりたい」「楽しく勉強したい」という意識を大切にした授業づくり

- ・児童生徒の学習の速さや理解の仕方等に配慮し、一人一人の学習状況の把握に努める。
- ・学習形態の工夫（1単位時間の中での一斉指導・小集団指導・個別指導等多様な学習形態）、指導方法の工夫（TTや少人数指導の実施・ITの活用等）、活動内容の工夫等により、一人一人の問題意識を大切にし、自ら問題解決できるように指導・援助する。

#### (2)個に応じた学習指導と言葉がけによる「やる気」の育成

- ・授業の中で、すべての児童生徒の関心・意欲を大切にしながら、常に、少しの成長を認めたり、励ましたりする言葉がけに努め、学習する喜びをもたせる。
- ・一人一人の学習のつまずきに適切に対応するとともに、学習の遅れは早期に補充するなど個に応じた指導を充実する。

#### (3)基礎・基本の重視と自発的な学習の推進

- ・児童生徒一人一人の学習状況を常に把握し、興味・関心を大切にした課題設定や学習展開を工夫する。

#### (4)学校の指導体制の改善

- ・個々の教員の指導方法を交流し、生徒指導や学習指導が全校体制として実践されるよう共通理解する。

## 2 学校生活を支える「信頼し合える人間関係づくり」がベース

### (1)教職員と児童生徒との人間関係づくりを大切に

ア 個性を尊重し、児童生徒の立場に立った人間味のある温かい指導を行う。

- ・児童生徒一人一人がよさや可能性を發揮できるように、意図的・計画的な活動の場の設定や評価に努め、自己有能感をもたせる。

イ 日常から児童生徒一人一人との触れ合いを多くする。

- ・よさを見つけてほめたり、わずかな進歩でもその努力を認めて励ましたりする。
- ・学習面や生活面でつまづいている児童生徒の思いを積極的に受け止め、一緒に乗り越えようとする姿勢で、アドバイスしたり不安等を聞いたりする。

### (2)児童生徒同士の間人間関係づくりを大切に

ア 自分のよさと仲間のよさを知るようにさせる。

- ・集団の一員として自分を發揮して活動する中で、自分のかけがえのなさに気付かせる。
- ・自分のよさを知ると同時に仲間の大切さを知り、仲間から学ぶ姿勢をもたせる。

イ 互いの存在を認め合わせる。

- ・自分の思いや考えを言葉で表現させ、心を通い合わせる。
- ・互いの違いやよさを認め合い、互いを大切に作る雰囲気をつくる。
- ・共同で学習したり、作業の役割を分担し合ったりする中で、みんなで学ぶこと、グループで学ぶことの楽しさを知らせるとともに、仲間のために尽くす心を育てる。
- ・誤解がある場合は、お互いに考えを交流させて解決の糸口を見つけさせる。
- ・困ったことや難しいことがあれば、みんなに伝えて知恵を出し合い解決を図らせる。

#### 運動会のある9月をのりきる指導援助（A中学校の実践）

A中学校では9月の不登校数が7月を下回った。昨年は9月に不登校が3倍に増えたという事実を受けて、その危機感から全校体制で不登校の未然防止に取り組んだ結果である。

A中学校では体育大会の「応援」が伝統になってきた。応援に対しての要求が高くなり、生徒同士で厳しく求め合う姿が出てくる。しかしそれを苦手とする生徒の存在を意識し、一人一人に目を向け、きめ細かく援助していくことを大切にしようとしたのである。

夏休み前に運動が苦手な生徒、声を出すのが苦手な生徒等、体育大会の取り組みに抵抗感をもちやすい子をリストアップし、夏休み中にもできるだけ声かけをして学校との関係づくりに努めた。また、応援リーダーには団の練習を進める中で、声出しや運動が苦手な生徒にどのように配慮したり、声をかけたりしていったら良いかということを考えさせたりした。

休み明けだから、運動会があるから仕方がないとしてしまうのではなく、一人一人に目を向けていくことで多くの不登校を防ぐことができる。特に全校や学年で取り組んだことが大きな成果につながっている。